

**死にかけた赤子の一瞬の笑  
みに感謝する世界がある。**

**シロップ一さじの治療が恵  
みである世界がある。**

**生きていること 자체が与え  
られた恵みなのだ。**



**故 中村哲医師 (73)**

アフガニスタンでの活動では、現地農民らの生活文化に溶け込み、価値・信仰を尊重し、困難かつ危険な作業を自ら率いて、多くのアフガン人や日本人、国際支援団体から尊敬を集めた。

**死にかけた赤子の一瞬の笑みに感謝する世界がある。シロップ一さじの治療が恵みである世界がある。生きていること自体が与えられた恵みなのだ。 by 中村哲**

◆パキスタン北西部のペシャワルでハンセン病治療と無医村での診療にあたっていた中村哲さんがさらに奥地に赴いた時である。ある家に呼ばれ乳児を診たが、今夜が峠だと告げるしかない重い病状だった。

だが中村さんが息を楽にする甘いシロップを与えると瀕死（ひんし）の赤ん坊は一瞬ほほえんだ。その夜に亡くなつたが、人々が中村さんをたたえたのは「言った通りだった」からだ。そこでは医師は神の定めを伝える者として尊敬されていた。

「死にかけた赤子の一瞬の笑みに感謝する世界がある。シロップ一さじの治療が恵みである世界がある。生きていること自体が与えられた恵みなのだ」中村さんは書いた。アフガニスタンで大干ばつが始まったのはその後であった。

「人々の暮らしを根底から奪った干ばつで何より命のための水が必要だった」中村さんがアフガンで井戸を掘り、やがてかんがい事業に取り組んだのはまず人々が「生きること」からすべてを組み立てるべきだとの信念からだった。

約1万6500ヘクタールの土地に水を供給し、65万人の命を保ったこの事業である。その間に同僚の伊藤和也（いとう・かずや）さんが武装グループによって命を奪われた。「暴力は何も解決しない」中村さんは伊藤さんのかんがいへの献身をそう追悼した。（2019/12/5 毎日新聞 余録から）

◆同会は2000年に起きた大干ばつを受け、03年に用水路建設を始めた。この年から参加した伊藤さんは作物の試験栽培などを主に担当。08年8月26日に武装グループに拉致、殺害された。（中略）

伊藤和也さんの志は、さまざまな人たちに引き継がれている。学校教材の編集を行う静岡県出版文化会（静岡市）は2015年から、中学3年の道徳の副読本で伊藤さんを紹介している。報道で事件を知った中学生が伊藤さんの活動報告などを読み、「私にとっての幸せ」を考えるという内容だ。同会は「伊藤さんの生き方に触れ、命や国際貢献について考えてほしい」と話す。（中略）

伊藤さんの両親は08年、アフガンの農業や教育支援に役立てるための基金を設立した。これまで

に三千数百万円が集まり、一部はイスラム神学校の建物建設などに充てた。10年で区切りを付ける考えだったが、全国から寄付はやまず、今後も続けるという。父の正之さんは「10年の節目が和也を思い出し、知ってもらえる機会になればありがたい」と話している。（2018/8/23 西日本新聞から）

◆「現在は砂漠化が進んでいます。その結果、1200万人が被災し、数百万人が餓死寸前の状態に陥る状況に見舞われたのです。水が不足すれば、農産物も収穫できません。食べ物がなくなれば、栄養失調になって抵抗力も落ち、感染症や病気になります。

赤痢やコレラなどの腸管感染症にかかる子どもが増え、せっかく診療所にたどりついたのに、待合室で診療を待つ間に子どもが亡くなることもあります。文字通り、集落が丸ごと消える状況も目の当たりにしました」

「現地でまず、面食らったのが貧しさです。ほとんどの人が、たった数十円のお金が足りないために薬が買えないことも少なくありませんでした。どうすればより多くの人に医療を届けることができるかを考えてきました」

「作業を手がける人たちの中には、内戦によって住むところを奪われた人もいます。家族がばらばらになり、食べ物も十分にない状況に置かれました。彼らの願いは、1日3食、ふるさとで家族と一緒に食事を共にすることです。用水路が完成しなければ、みじめな難民生活を続けるしかありません」

「現在では砂漠だったとは思えないほど、緑豊かな土地になりました。用水路が延びていくごとに、草や木も生えるようになります。今では野菜作りや畜産、田植えも行われているほどです。水が届くようになると、荒れた村も少しずつ復活し、人の交流も活発化します」

活動を続ける中で『100の診療所よりも1本の用水路』と言い続けてきましたが、こうした状況を目にすると、水の力を改めて実感します」（エコノミスト・オンライン 2018/9/10から）